# ベトナム人民の闘いにまなびつつ

## 七〇年代の決意を

（二面下段より続く）

と配達が止ったのですが、最近また入りはじめた。ひろげてみたら、宮浦闘争でこわれた保安機器の問題で鉱山保安監督署が申し入れたことが一面にのっている。ハハアこれだから入れはじめたのだなと思った。そのほかは四山鉱のZD運動の記事が多い。多分私はもう会社をやめたので考えがかわるかもしれないと思ったのではないでしょうかネ。

何がうれしいのか、笑つているCO患者の受川さん

【司会】三池闘争後のこと、いまの問題などいろいろでましたが、一九七〇年をむかえて、まずこれだけはやりたいという決意はありませんか？

**目先にとらわれずに**

【知花】私は目先きのことにとらわれるなといいたい。就労後、長期抵抗のなかで差別にたえてきたのは目先きのことだけではなかったから。大きい話だがアメリカがベトナムには勝てなかったことをみても目先きにとらわれるなといいたい。

**ハラをすえて**

【河口】今年は一口にいって、きびしい闘いの年になると思う。私も停年退職した身ですが七〇年いっぱいは大牟田にいて一組合員として闘いたいと思います。天道社宅の下の警察アパートの横に、また新しいのが立ちはじめている。そこには「警察官待機宿舎」と書いてある。意図はあきらかだし、ハラをすえて闘わねばならないと思います。

**いままで以上に**

【林田】いままで以上に、子供たちのためにもがんばります。

**守る会を**

【宮原】自民党政府の独裁を許さないために全力をあげたい。職場でも地域でも体制をつくり、守る会の拡大に全力をあげたいと思います。

【池畑】三池闘争、CO闘争を闘ってきて、より多くの仲間と手をむすぶことができた。すべての問題の本質をみきわめて闘いたい。

【司会】どうもありがとうございました。みなさんの決意はみんなも同じだと思います。今年もがんばりましょう。

# 七二年返還を拒否する

## 新たな支配への闘いを準備

### ＜沖縄の怒り＞

儀間　真俊

日本の運命は、真夜中に決定された。そして沖縄は、再び押し寄せてくる新たな〝支配〟にそなえてたたかいの準備をはじめた。

六九年一一月二二日午前一時、佐藤首相とニクソン米大統領による「日米共同声明」が発表された。この日は、秋もすでに深いというのに、妙にむし暑く、小雨がしとしと降る悪天候だった。

筆者が体験した二四年まえの〝あの日〟もこんな日だった。沖縄本島の南部中央部にあたる東風平（こちんだ）村での体験である。

まだ小学校三年というのに、わたしたちは日本軍の守備隊の絶対的命令に従って、陸軍の野戦病院に「手留弾」箱を運んだ。そのとき指揮を取っていた下士官は「敵が防穴洞――野戦病院になっている防穴洞に侵入してる際に攻撃する患者のものだ」と説明していたが、実際は、強制的に自殺命令がでたときに使われるものであった。

わたしたち家族が隠れているすぐ隣りの防穴洞では、乳飲み児が、戦陣訓ばかりしかしゃべらない若い中尉の日本刀で殺された。理由は、敵陣への突撃には喚いてばかりいる赤児はじゃまだ。国のために――ということだった、という。母親は発狂し、首から肩にかけてなくなったわが子を抱いて機銃掃射してくる米軍機に向かって走って行った。

遺恨二四年――。

沖縄全体が太平洋戦争の遺族である「沖縄」では、唯一の悲願は平和憲法のもとに帰ることであった。だが、「沖縄の復帰なくして日本の戦後は終わらない」と佐藤政権がたくらんだ沖縄返還は、日米安保体制下への復帰であった。

しかし〝戦力保持〟を禁止しているはずの祖国は、アジア最強の軍隊を育てている。いまやアジア侵略をくわだてるために沖縄が必要になってきたのだ。

沖縄は、二四年間いろいろな迫害をうけてきた。土地強奪、米軍機の墜落、軍用車によるひき逃げ、殺人、政治的圧迫、数えあげればきりがない。

本土政府―保守政権は一度だって手をさしのべなかった。「施政権が違う」という理由だった。

七二年返還を拒否する――。本土政府不信は、保守、革新を問わず一致している。本土政府の野望に利用されていたことを知ったのである。共同声明で。

六九年一一月二六日、佐藤帰国のこの日に那覇市内の与儀公園予定地で開かれた沖縄県祖国復帰協議会主催の「日米共同声明抗議県民総決起大会」には、これまで一度もこの種の大会に参加しなかった人たちがこぞって出席していた。

佐藤政権とニクソン政権が仕組んだこの七二年返還を拒否することによって、強化の一途をたどる日米安保体制――軍国主義化を食いとめるひとつのクサビになる、というものである。

沖縄における七〇年代の闘争は七二年返還拒否運動を通して、軍国主義からの〝自由回復〟〝人間回復〟の闘争を展開しよう。

### 臼井で盆栽展

▼去る十一月十六日、臼井盆栽会（会長―荒木正さん）は、臼井売店側の道路で盆栽展示会を開催した。恒例の催しで、例年は同月九日だったのを、ことしは大集会のためこの日にずらして開催したもの。

展示は約百鉢、相当のにぎわいだった。COカンパも集った。さっそくCO患者守る会にカンパ。

同会はもう「来年も……」とはりきっている。

# 新年をむかえて

主婦会長　久保時枝

組合員・主婦会家族の皆さま、新しい年を迎えまして一言ご挨拶申し上げます。

十年ひと昔という言葉をよく聞かされたものですが、社会の進歩とともに、今日では最早や十年の歳月は昨今のように思えます。

三池闘争終結後組合員の皆さんは、差別と低賃金にしいたげられ、苦しい時も嫌な時もお互いにはげましながら、幾多の問題と取り組みながら、十年の歳月を耐え抜いてこられまして、私たちは心から「ご苦労さまでした」と申さずにはいられません。

主婦会の現状を考えて見ます時、生活の維持や子どもの問題など、主婦にとりましては二重、三重と精神的にも体力的にも、たいへんな過重となり、地域での集りや行動に対しての参加が少なく、主婦会活動に対する理解が不十分になったことも事実でした。しかし、三池闘争を家族ぐるみで闘ってきました。お互いの助け合いの精神は、地域の中で、内職先きで生かされてきました成果を見逃すことはできません。

遺族・CO闘争を中心に、数々の闘いの思出が記憶も新たに私たちの心に、何時までも残ることでしょう。

資本主義社会の中で、支配体制はますます烈しく労働者と家族の生活を根底から奪おうとしています。特に石炭産業に働く労働者は、政府の第四次石炭政策にもとずく合理化攻撃を受けて、常に生命の危険におびえながら、人命無視もはなはだしく強行されております。

一方日本の経済は非常にのび、生産力も世界第二位といわれていますが、労働者の生活水準は世界第二十三位といわれています。

今年はいよいよ、戦争政策を進めていくのか、平和憲法を維持していくのか、の重要な七十年安保改訂期を迎えました。さきの日米共同会議で佐藤首相は、「沖縄は核抜き本土なみで、七十二年返還を約束した」と、いかにもほこらしげに話していますが、これはとんでもないことです。核についても、七十二年返還も、ベトナム戦争が終ってみなければその時点で協議するということです。

皆さん、これはたいへんなことです。昨年からの遺族・CO闘争に引きつづき、新年早々私たちは港務所の合理化もかかってきています。

主婦会の皆さま、七十年です。総決起致しましょう。

## 臼井で盆栽展

▼去る十一月十六日、臼井盆栽会（会長―荒木正さん）は、臼井売店側の道路で盆栽展示会を開催した。恒例の催しで、例年は同月九日だったのを、ことしは大集会のためこの日にずらして開催したもの。

展示は約百鉢、相当のにぎわいだった。COカンパも集った。さっそくCO患者守る会にカンパ。

同会はもう「来年も……」とはりきっている。

## 皇宮警察が赤い腕章にケチ

正月にはにぎあう皇居だが、皇宮警察が、郵便配達に来た全逓の組合員の赤腕章にケチをつけた。この話しがあきらかになったのは宮内庁内の郵便局長から当局に、「組合役員が赤腕章をつけてはいってくるのは困る」といってきたため。皇宮警察は「天皇の散歩の目にふれるからまずい」と集配の組合員の業務を妨害した。全逓中央郵便局の仲間は「おれたちの当然の権利としてやっていることに文句をつける筋あいはない」「天皇の目にふれてまずいのなら配達してやらないぞ」と怒っている。（全逓中郵）【KNA】

## 随筆

# ある別離

三川　筑紫次郎

ますらおと思える吾や水くきの水城の上に涙のごはむ

天力二年（七三〇年）太宰府の長官であり万葉歌人としても名高い大伴旅人が中納言に昇進し、青丹により奈良の都へ還る時、任地筑紫路を離れる際の歌である。

俺は終戦の翌年この炭鉱に入り、何一つ不平も言わずせいたくもせず、モグラのように太陽のささない地底で真っ黒になって石炭を掘ってきた。ところが運悪くあの三池大爆発にあい、八百余名の同僚とともにCO患者のらく印を押され、いまでは外特の職を与えられ、その上定年退職という無情な制度のため住みなれた炭鉱を追われようとしている。

「眠るんじゃない、しっかりせよ」

あの日俺たちは身の危険もかえりみず、後ガスと炭じんの舞う視界のきかない狭い坑道をはいながら被災者を探しまわった。そこには傷を負った獣のように暴れ狂うもの、目を閉じて深い眠りに陥ちいろうとする者、無心に念仏を唱える者、など全く手の施しようもない惨状だった。

数刻の後、線路に転がる屍に注意しつつ、これらの人を担送する道中には、魚市場の水揚げされたまぐろそのままの姿をしたおびただしい数の犠牲者をならべた個所もあった。季節の移ろいを告げる草木はもちろん、手向けの花さえない闇の世界でのでき事である。

「あんたの病状は固定して、これ以上の治療はできない。悪いところは私病でかかりなさい」診察を受けるたびに精神科の医師はいう。親しい友人の一人は性的不能のため、妻からも馬鹿にされているそうだ。もしこれがその医師の場合だったら、地球がひっくり返ったほど、さわぐに違いない。CO患者だからといって放置されてよいだろうか。西本さんの場合でも適切な指導がされていたなら、自分を酷使して寿命を縮めることもなかったのだ。

君が手もまじるなるべし花すすき

元禄二年（一六八九年）父の故郷の長崎を尋ねた俳人の向井去来が再び京都へ帰る時、親類、知人に見送られて日見峠で別れを惜んだ際に、この句を残したという。

別離といえばすぐ、旅人や去来の美しい歌や句が浮んでくる。でも別に彼等の境遇をうらやましいとは思わない。俺には労働者だけの持つ、喜怒哀楽と誇りをもっている。闘いの中途で炭鉱を去ることは心苦しいけれど、素朴でしかも優しかった職場の友との交流は生涯俺の胸に焼きつき、今後何処に居てもこの人たちの健康と多幸を祈らずにはいられないだろう。

（職場新聞「いのち」より）